津山市東一宮土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

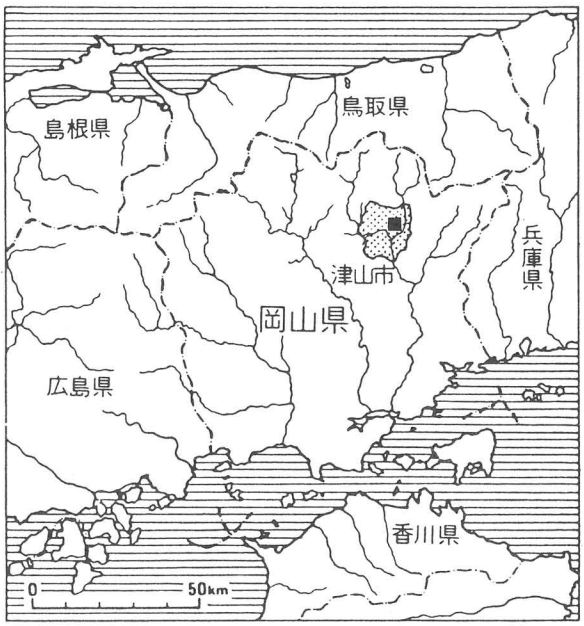
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第32集

1990

津山市教育委員会

津山市東一宮土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第32集



1 9 9 0

津 山 市 教 育 委 員 会

序

津山市東一宮地区の、約70ヘクタールの土地を対象とした土地区画整理事業実施に伴い行った埋蔵文化財確認調査の報告書を公刊いたします。

対象地は大部分が水田で、津山市でも古代の条里制の水田区画が非常によく残ったところといわれておりました。計画段階ではいわゆる周知の遺跡がこれ以外知られていませんでしたが、計画に対応して実施した当教育委員会の分布調査によって、各所に須恵器、中世土器等の破片が散らばっていることが分かりました。

このため国庫補助金を得て、緊急に確認調査を実施したものです。この結果、古墳時代の広大な集落遺跡が発見されました。

ここに確認調査が終了致しましたので、とりあえず報告します。多々不備があるかもしれませんが、御活用頂ければ幸甚です。

平成２年３月31日

津山市教育委員会

教育長　萩　原　賢　二

＊＊

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに　　頁

1.　調査にいたる経過 1

2.　位置と発掘調査 1

（１）位置と環境 1

（２）組織 2

（３）第１次調査の経過 2

（４）第２次調査の経過 4

第２章　発掘調査

1.　第１次調査の概要 7

2.　第２次調査の概要 15

3.　出土遺物 20

第３章　概括 22

例　　言

1．本書は、岡山県津山市東一宮地区における土地区画整理事業の実施に伴い、津山市教育委員会が実施した埋蔵文化財確認調査の報告書である。

2．現地発掘は２ヵ年度に渡り、第１次調査は昭和63年11月21日から平成元年２月23日まで、第２次調査は平成元年11月21日から平成２年２月20日まで実施した。

3．確認調査及び報告書作成に要した費用は、文化庁の埋蔵文化財緊急調査費補助金を得、津山市費で対応した。調査の実施に当たっては、津山市東一宮土地区画整理組合理事長中島一男氏他組合の皆様方の全面的な御協力を頂いた。調査中、文化庁記念物課文化財調査官須田勉氏、岡山県教育委員会の各位に御指導、御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

4．本書の執筆、編集は、津山市教育委員会文化課職員中山俊紀がおこなった。

5．遺構、遺物の実測、製図は中山がおこなった。

6．本書に使用したレベル高は、すべて海抜絶対高である。

7．出土遺物、図面類は、津山市沼の津山弥生の里文化財センターに保管している。

＊＊

挿　図　目　次

Fig. 1. 周辺主要遺跡分布図　(縮尺１：50,000)……3

Fig. 2. 区画整理対象地土器片散布地点図　(縮尺１：50,000)……5

Fig. 3. 試掘溝配置図……6

Fig. 4. 第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・１～４(縮尺１：80)……8

Fig. 5. 第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・５～７(縮尺１：80)……9

Fig. 6. 第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・８～11(縮尺１：80)……10

Fig. 7. 第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・12～14(縮尺１：80)……11

Fig. 8. 第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・15～18(縮尺１：80)……12

Fig. 9. 第二次調査試掘溝、断面図 Ⅱ・T・１～８(縮尺１：80)……18

Fig. 10. 第二次調査試掘溝、断面図 Ⅱ・T・９、10、12(縮尺１：80)……19

Fig. 11. 出土土師器実測図　(縮尺１：４)……21

Fig. 12. 出土須恵器実測図　(縮尺１：３)……22

Fig. 13. 古墳時代集落遺跡推定範囲(縮尺１：3,000)……23

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

津山市東一宮地区の約69haの土地について、土地区画整理事業実施の計画が具体化し、昭和62年4月に津山市都市計画課から津山市教育委員会にその計画範囲の文化財の有無について照会があった。

対象地内には、遺跡地図掲載の遺跡はなかったが、対象地一帯には条里制の土地区画が良好に遺存し、遺跡分布調査もおこなわれていない地区であったので、遺跡分布調査の実施が必要な旨、回答をおこなった。

昭和62年5月1日付で、津山市建設部部長　田原清資より津山市教育委員会教育長　福島祐一宛に埋蔵文化財分布調査依頼書が提出され、文化課では、これに基づき昭和62年6月1日から6月5日まで対象地一帯の遺跡分布調査を実施した。

この結果、対象地ほぼ全域で極く微量ではあるが、須恵器、土師器、中世土器等の散布がみられた。このため、昭和62年6月23日付で建設部長　田原清資宛に分布調査結果の回答をおこない、確認調査を実施する必要のあることを連絡した。

昭和62年11月16日付で、東一宮土地区画整理準備組合理事長　中島一男、津山市建設部部長田原清資から、埋蔵文化財確認調査実施依頼書が提出された。これに基づき東一宮土地区画整理準備組合、津山市建設部、教育委員会三者で確認調査の実施に関する協議をおこなった結果、昭和63年秋に確認調査を津山市教育委員会が実施し、これにかかる経費は公費負担とすることになった。

昭和63年6月13日付東一宮土地区画整理準備組合理事長　中島一男名で、文化財保護法第57条の5第1項の規定に基づく遺跡発見の届出が提出され、津山市教育委員会教育長　福島祐一名で、昭和63年10月15日付、確認調査実施のための文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知を行った。

昭和63年11月1日付で正式発足のなった、津山市東一宮土地区画整理組合理事長　中島一男と津山市教育委員会教育長　福島祐一は、東一宮土地区画整理事業実施に伴う埋蔵文化財確認調査に関する覚書を締結し、同11月21日より、現地調査に着手した。

2．位置と発掘調査

（1）位置と環境

調査対象地は、津山市街地北方約4ｋｍ横野川両岸に開けた河岸段丘上に位置し、山間の小盆地地形を呈している。東一宮の集落がやや人家の密集する以外大部分水田である。津山市内の水田地帯としては、代表的な広さを有している。水田規模は比較的広く東西南北の水田区画

は、古代の条里制の跡を残す代表例としてよく取り上げられてきた。一宮には、美作国一宮中山神社が存在し、その集落は、門前町として中世以降牛市が開かれるなど栄えてきた。

南方の大田、沼地区では多数の弥生時代遺跡が発掘調査されており、東方の紫保井地区でも大規模農道敷設に伴って、弥生集落紫保井遺跡が調査されている。また北方横野では、弥生墓地上原遺跡が岡山大学によって調査されている他、西方の丘腹、丘裾部で弥生土器の散布地が知られている。

古墳時代の集落として先の紫保井遺跡、西約２ｋｍのアモウラ遺跡が知られる。

古墳としては、西方の丘腹に後期群集墳が点在し、北方横野には前方後円墳丸山古墳（推定全長45m）が存在する。また明確ではないが、調査対象地北に隣接して、水田中に土まんじゅうがあり、地元の人の話によるとかつて石室様の石材が開墾中露呈したという。水田開墾によって大幅に掘削され変形しているが、直径20m弱の円墳であった可能性が強い(俗称熊の頭)。

周辺部に多くの遺跡を抱えた中央部の平地ということで、この地区の確認調査の結果は注目された。

（２） 組　　織

調査主体　　津山市教育委員会

教育長　福島祐一　平成　元年６月３０日退任

教育長　萩原賢二　平成　元年７月　１日着任

調査担当　　津山市教育委員会　　文化課

参事兼文化課長　　須江尚志

文化係長　　籾山三千穂

主任　　中山俊紀

調査作業員

第１次　青野英雄　坂上静子　坂出豊一　坂出　安　永田貴美子

松村竹子

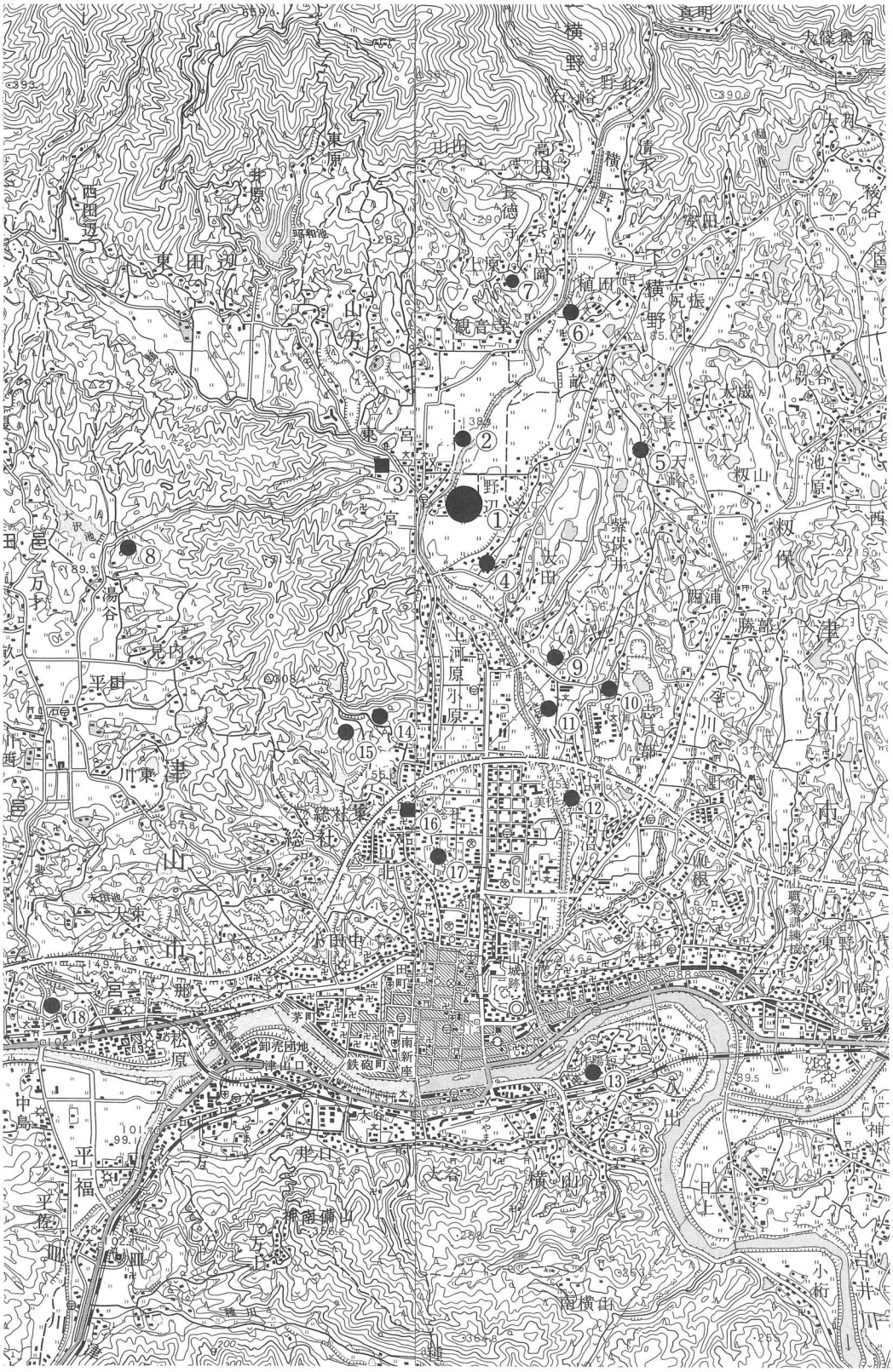
第２次　坂出豊一　坂出　安　田中善文　田口喜美子　永田貴美子

松村竹子

遺物整理　　中山俊紀　日笠月子　赤松百合子

（３）第１次調査の経過　（Ⅰ-Ｔ-１～Ⅰ-Ｔ-18）

確認調査の当初予定は、単年で事業対象地全域67haについて50m方眼を設定し、各２ｍ角の試掘溝を掘り下げる計画でいたが、予算上の都合で確認調査実施期間を２ヵ年とし、要所ようしょに試掘溝を設定し掘り下げる計画に変更した。また、経費削減の為、重機を導入し表土掘削及び埋め戻しをしようとしたが、対象地には重機導入可能な道路はなく、水田ないしは現農



1. 東一宮散布図（正善庵遺跡）
2. 古墳（名称なし）
3. 中山神社
4. 酪農試験場地内遺跡
5. 紫保井遺跡
6. 下横野丸山古墳
7. 上原遺跡
8. アモウラ遺跡
9. 大田十二社遺跡
10. 沼遺跡
11. 京免遺跡
12. 竹の下遺跡
13. 桃山遺跡
14. 権現山遺跡
15. 下道山遺跡
16. 美作国府跡
17. 高橋谷遺跡
18. 史跡美和山古墳群

Fig. 1. 周辺主要遺跡分布図　（縮尺１：50,000）

道を通行すると水田畦畔を大規模に破壊する恐れがあったので区画整理組合と協議、すべて人力により掘り下げを図ることとした。

掘り下げ計画試掘溝は、Ｔ１～Ｔ１３までの１３本、各溝幅２ｍ、長さ１０ｍで、調査予定面積２６０㎡であった。

調査対象地は、横野川を挟んで大きく東西に分断されるので、調査は西岸（Ｔ１～Ｔ８）から着手した。

計画変更による調査費不足という事態も考えられたので、Ｔ１、２、４、５、７、８については２ｍ×５ｍを掘り下げ、いずれも地下遺構の存在が認められなかったので試掘溝を延ばさなかった。Ｔ１～Ｔ８の調査結果は、各試掘溝とも横野川の氾濫源としてのあり方を示しており、中世以降の水田層の遺存が見られたり、中世土器の発見があったが、明確な遺構の存在はなかった。

調査の重点を東岸に移すため、この時点でＴ１～Ｔ８については、埋め戻しをおこなった。

東岸の調査では、Ｔ９、１１、１３で古墳時代須恵器、土師器（５～７世紀）が多数発見され、精査の結果Ｔ９、１３で竪穴式住居とみられる落込みが確認され、広範に古墳時代集落が存在することが推測された。

このころ、調査経費にも若干の余裕が出る見通しがたってきたので、次年度調査予定地のうち北部分に、新たに５本の試掘溝を設定（Ｔ１４～Ｔ１８）掘り下げを図った。これらの試掘溝については、いずれも中世土器の発見はあったが、明確な遺構には当たらず、中世以前の包含層の残存は認められなかった。

平成元年２月23日、すべての試掘溝を埋め終って、現地調査を完了した。

全試掘溝は、計１８本、発掘調査面積は約２８４㎡である。

（４） 第２次調査の経過 （II−T−１～II−T−10、II−T−12）

第２次調査の着手は水田の刈り取り後、平成元年11月21日より実施した。調査予定試掘溝の本数は計１２本、各幅２ｍ長さ１０ｍで調査予定面積は２４０㎡であった。しかし、このうち１本については地権者の承諾が得られにくく、調査を当面見合わせ、周辺部の状況をみて対応を考慮することにした。結局、周辺の試掘溝調査の結果、この試掘溝については調査を断念することにした。

調査対象地は広大であるため、前進基地としてテントを設営し、東部分から南へすすめ、南端の試掘溝の調査を終了した段階でそれまでの試掘溝を埋め戻し、テント移動を行って、西半の試掘溝の調査に移行した。大半の試掘溝は、地中が河原状で砂利、礫、粘土で構成されており、掘り下げは難航した。

最終調査試掘溝本数は、１１本。この内１本については長さを１１ｍとしたため、調査は、２２２㎡となった。現地調査終了は、平成２年２月20日である。

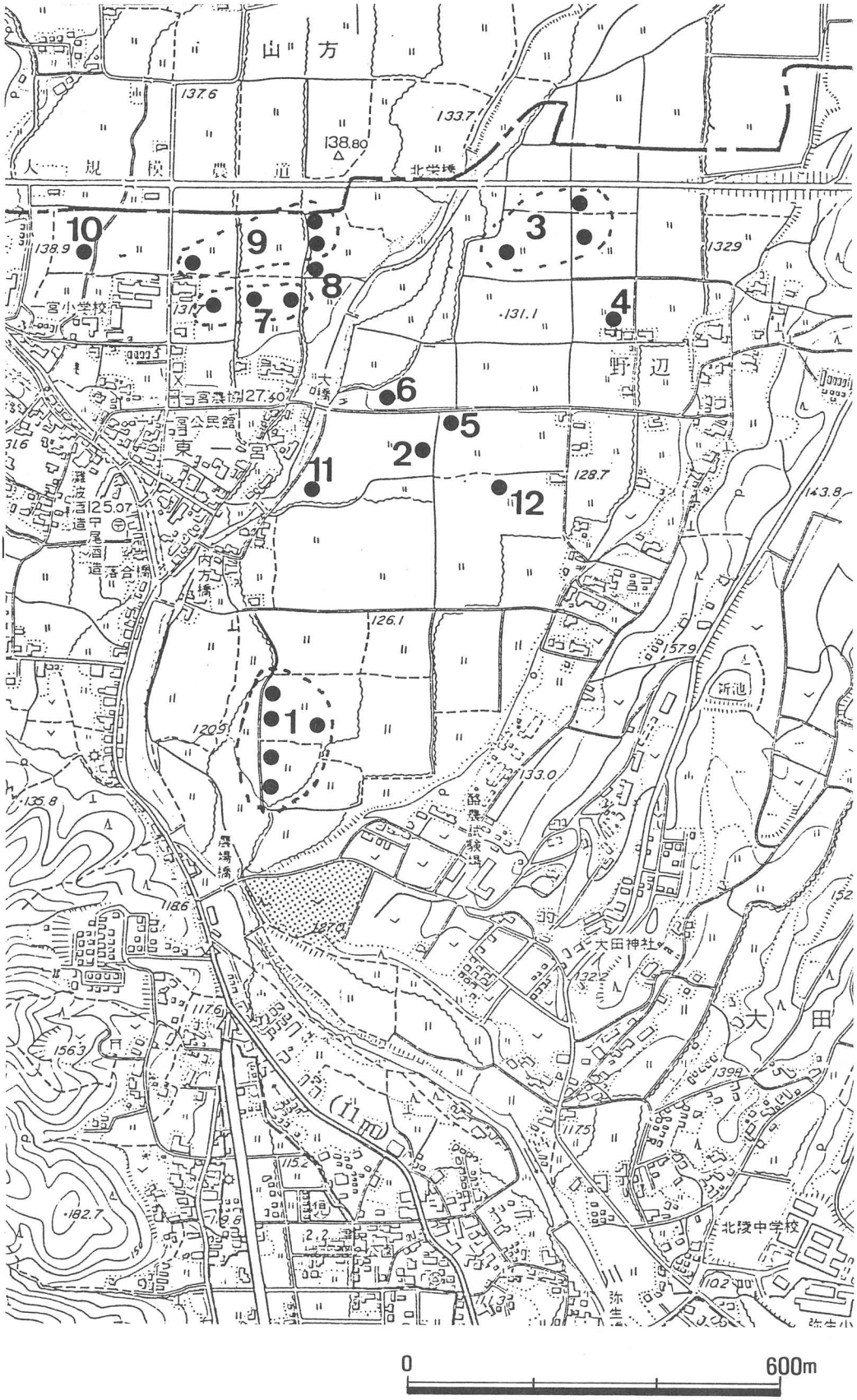


Fig. 2　区画整理対象地土器片散布地点図　(縮尺１：10,000)

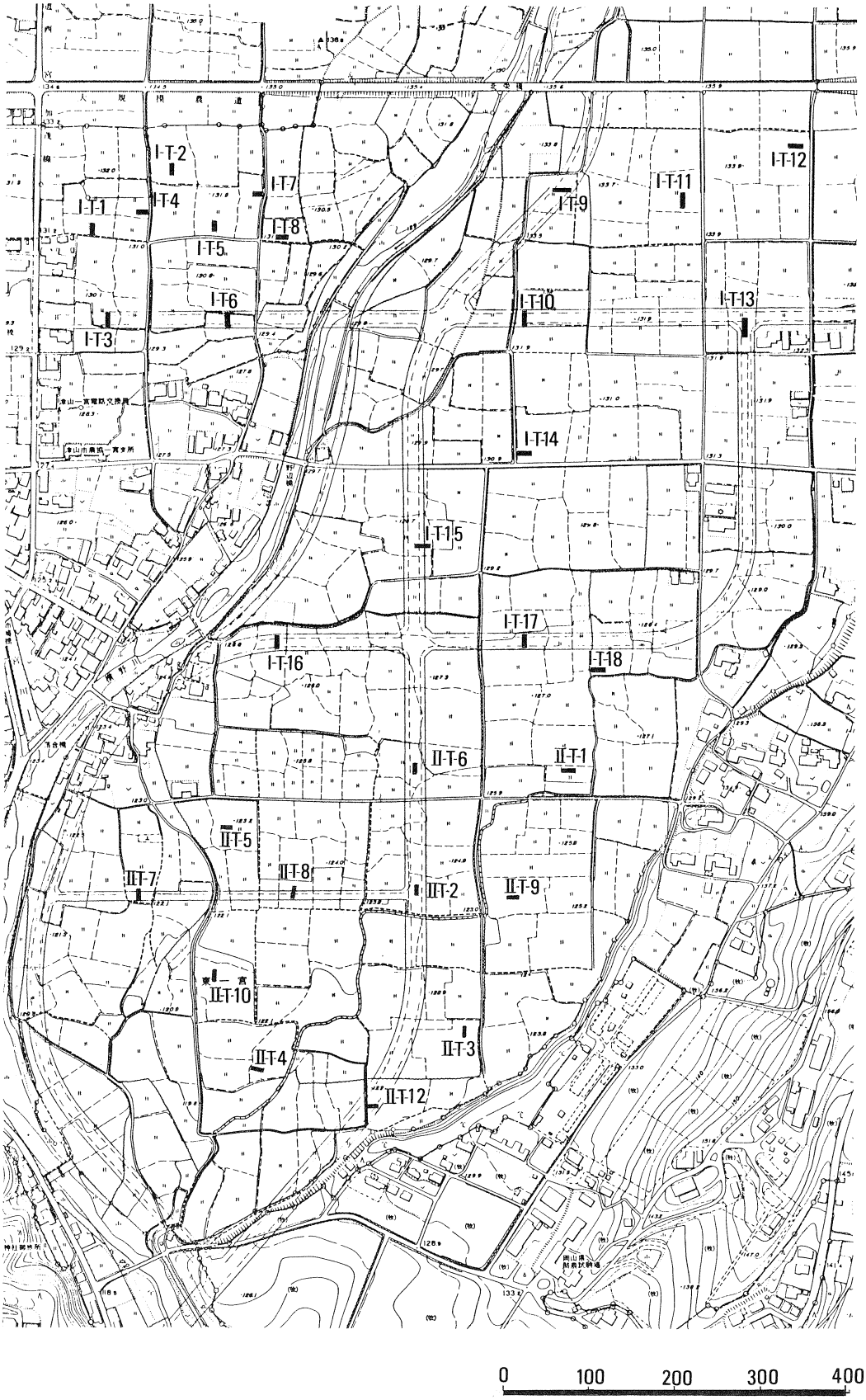

I-T-1
I-T-2
I-T-3
I-T-4
I-T-5
I-T-6
I-T-7
I-T-8
I-T-9
I-T-10
I-T-11
I-T-12
I-T-13
I-T-14
I-T-15
I-T-16
I-T-17
I-T-18
II-T-1
II-T-2
II-T-3
II-T-4
II-T-5
II-T-6
II-T-7
II-T-8
II-T-9
II-T-10
II-T-12
0
100
200
300
400m

Fig. 3　試掘溝配置図

第2章　発　掘　調　査

第1次調査の概要

各試掘溝の概要

I-T-1　2×5m

第2層で、中世土器片が発見された以外、遺物の発見はない。以下基盤層の礫層に至るまで砂質の堆積層がつづき、河川氾濫による堆積を示している。湧水が激しく、旧地形上浅い谷地形を呈していた部分であろうと推測された。遺構の発見はなし。

I-T-2　2×5m

第4層で、中世土器が発見された。同層は、中世の水田耕作土とみられ、一部畦畔状の高まりがみられた。第4、5層間の不連続層は、マンガ沈着層である。以下洪水堆積とみられる粘土質層がつづき、基盤粘土層に粗砂が堆積していた。いずれも無遺物層である。

I-T-3　2×10m

第2層に中世土器を含む。第2、3層の間に細砂の薄い広がりが二層認められる。中世以降の水田形成にかかわる痕跡であろう。以下旧地表を示すとみられる基盤粘質土にいたるが試掘溝中央部を東西に溝状に落込みが走り粗砂が堆積している。遺構の検出はない。

I-T-4　2×5m

第3層に中世土器片、瓦片を含む。第4層は旧地表とみられる暗灰色粘土層で、以下灰色砂層、基盤粘土層にいたる。遺構の発見はない。

I-T-5　2×5m

第2、3層中に、中世土器片を含む。いずれも、中世以降の水田層と考えられる。第4層は、洪水による荒砂層で、第5層は旧地表とみられる礫を多くふくむ灰黒色土層で以下基盤の礫層に至る。遺構の発見はない。

I-T-6　2×10m

現耕作土直下は大部分第4層の基盤礫層で、上位堆積層の残存はほとんどない。南端部には、灰色ないしは暗灰色の粘質土層が存在し、第2、3層には中世土器片が含まれていた。第4層南端は、黒色粘質土が多く含まれるようになる。

I-T-7　2×5m

河川氾濫による堆積層が多数存在し、安定した水田層として遺存するのは、第2層旧水田耕作土とみられる灰色粘質土層のみである。第2層には、土鍋等の中世土器片が発見された。基盤層は第8層の黄色粘土層である。北断面に残る縦の杭状痕跡は木質腐食痕とみられるが、人工のものではなく、木の根等の自然状態のものであろう。

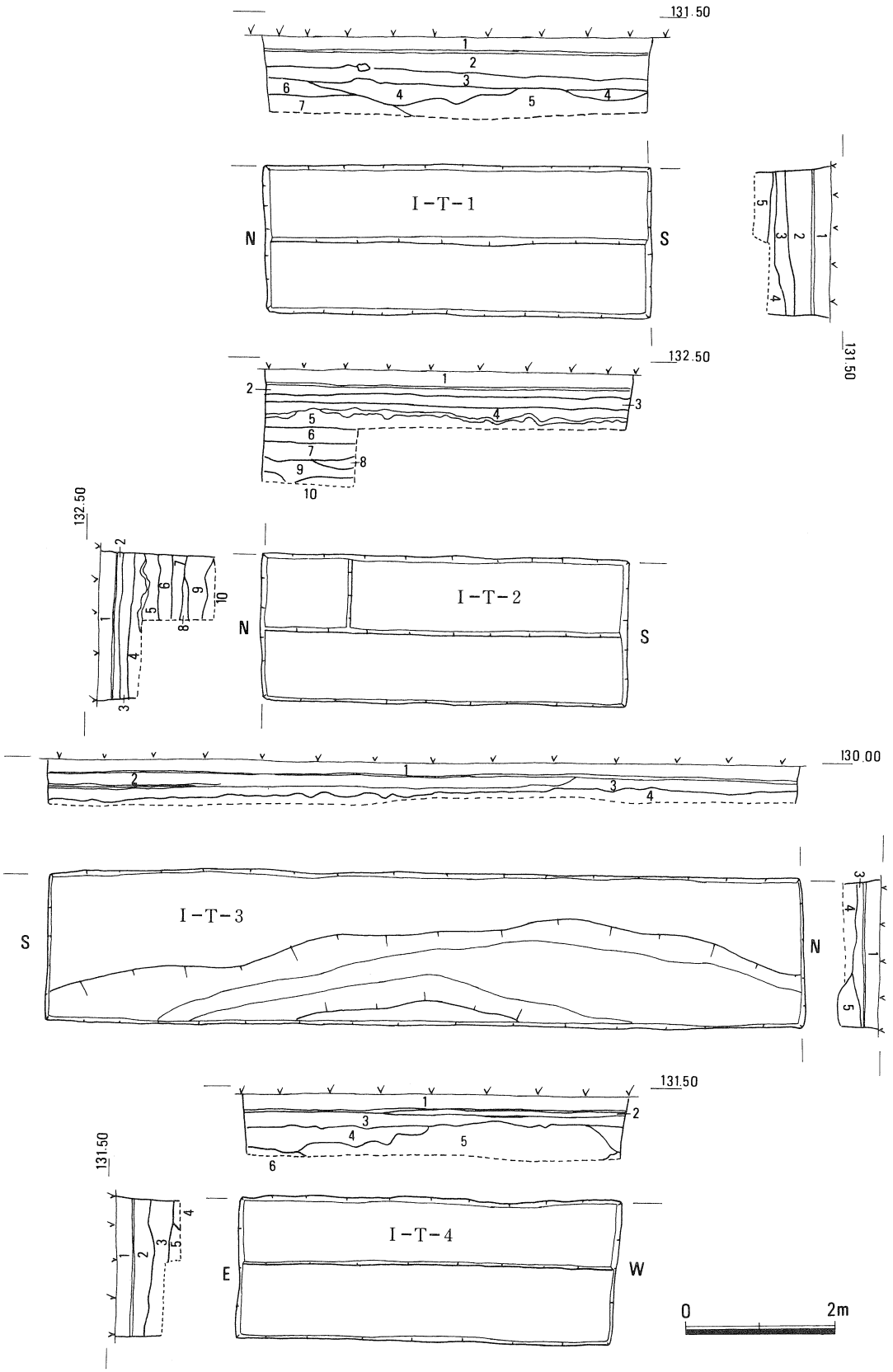


Fig. 4　第一次調査試掘溝　平、断面図　I・T・1～4　（縮尺1：80）

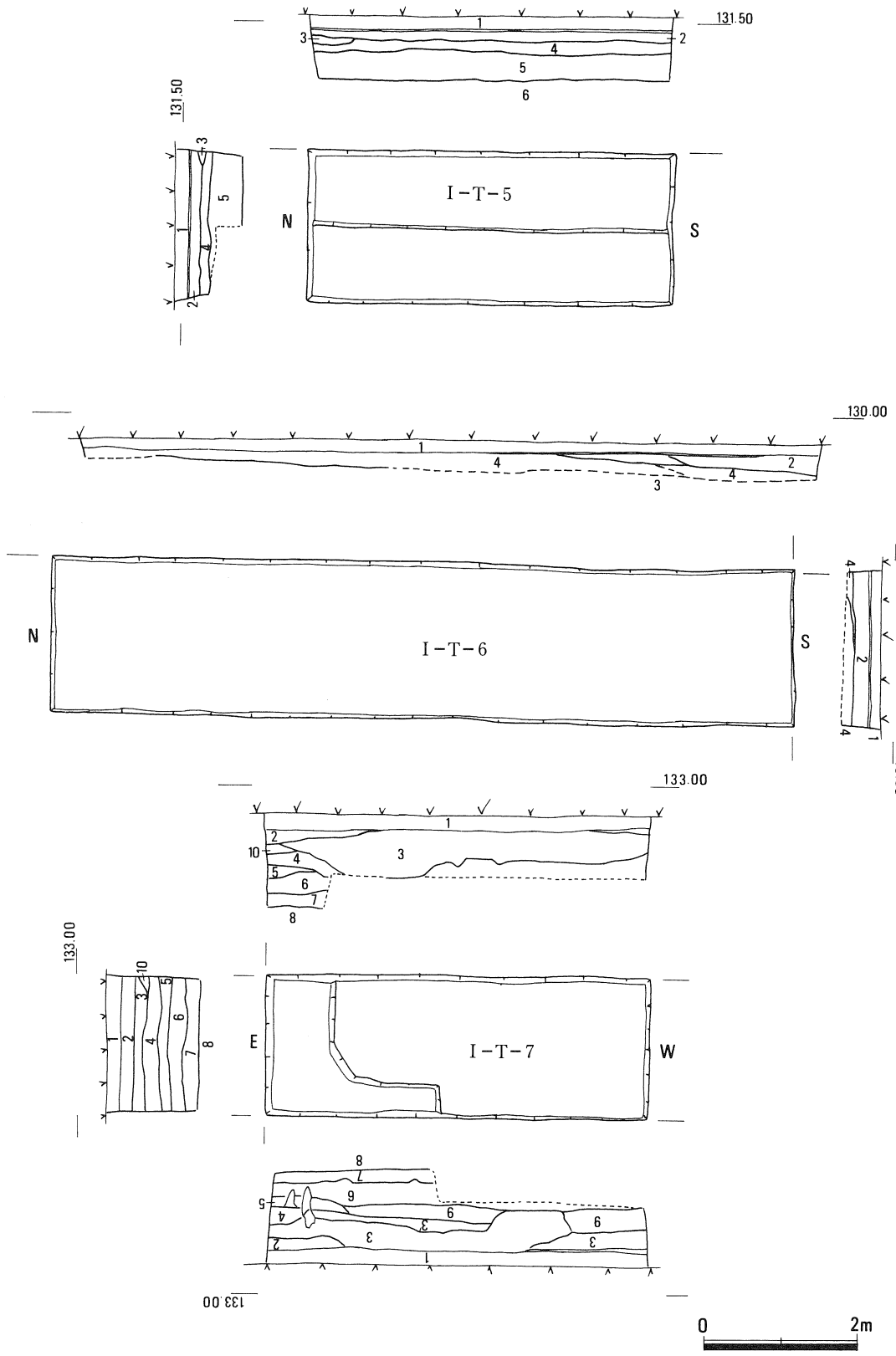


Fig. 5　第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・5～7　（縮尺1：80）

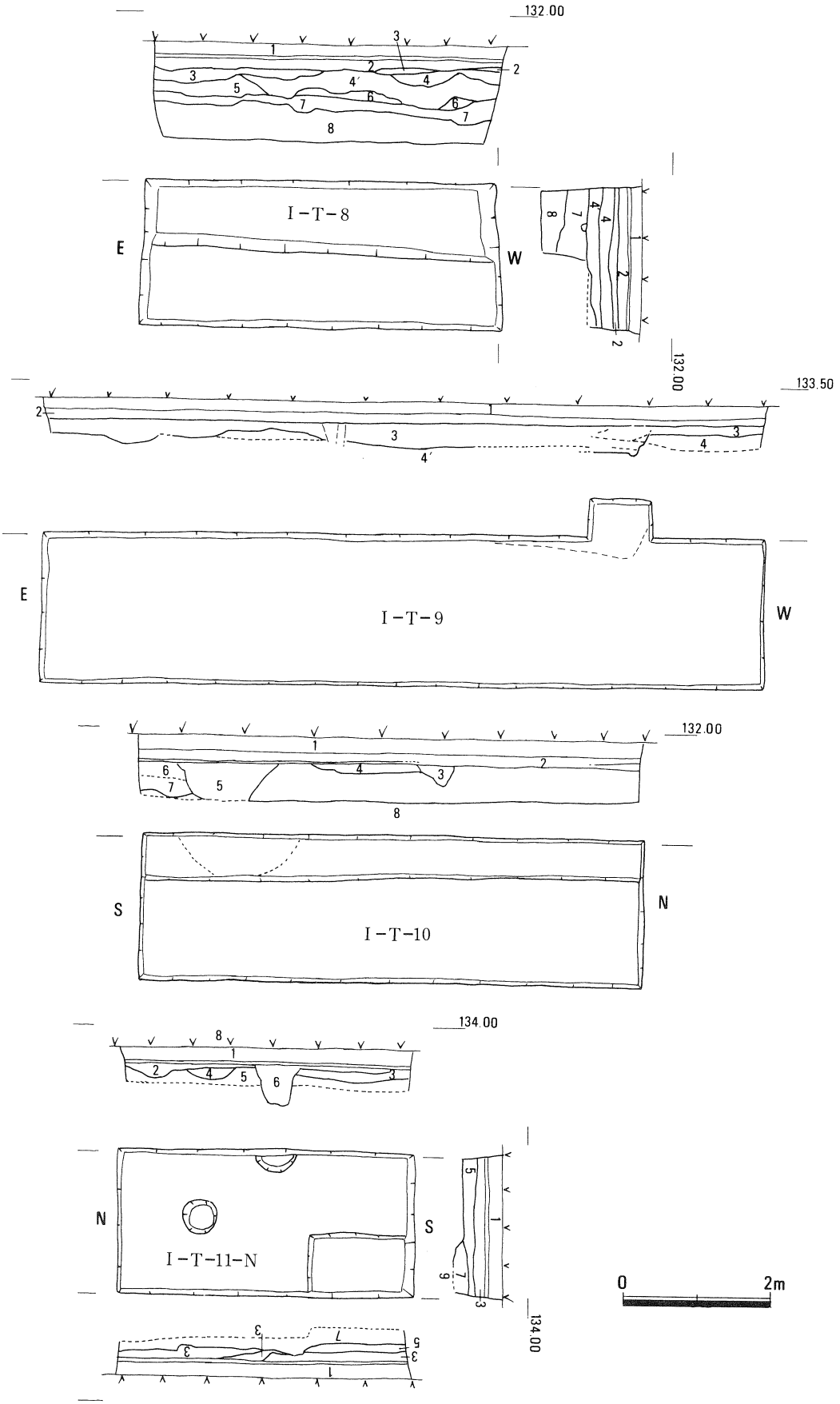


Fig. 6　第一次調査試掘溝　平、断面図　Ⅰ・T・8～11　（縮尺1：80）

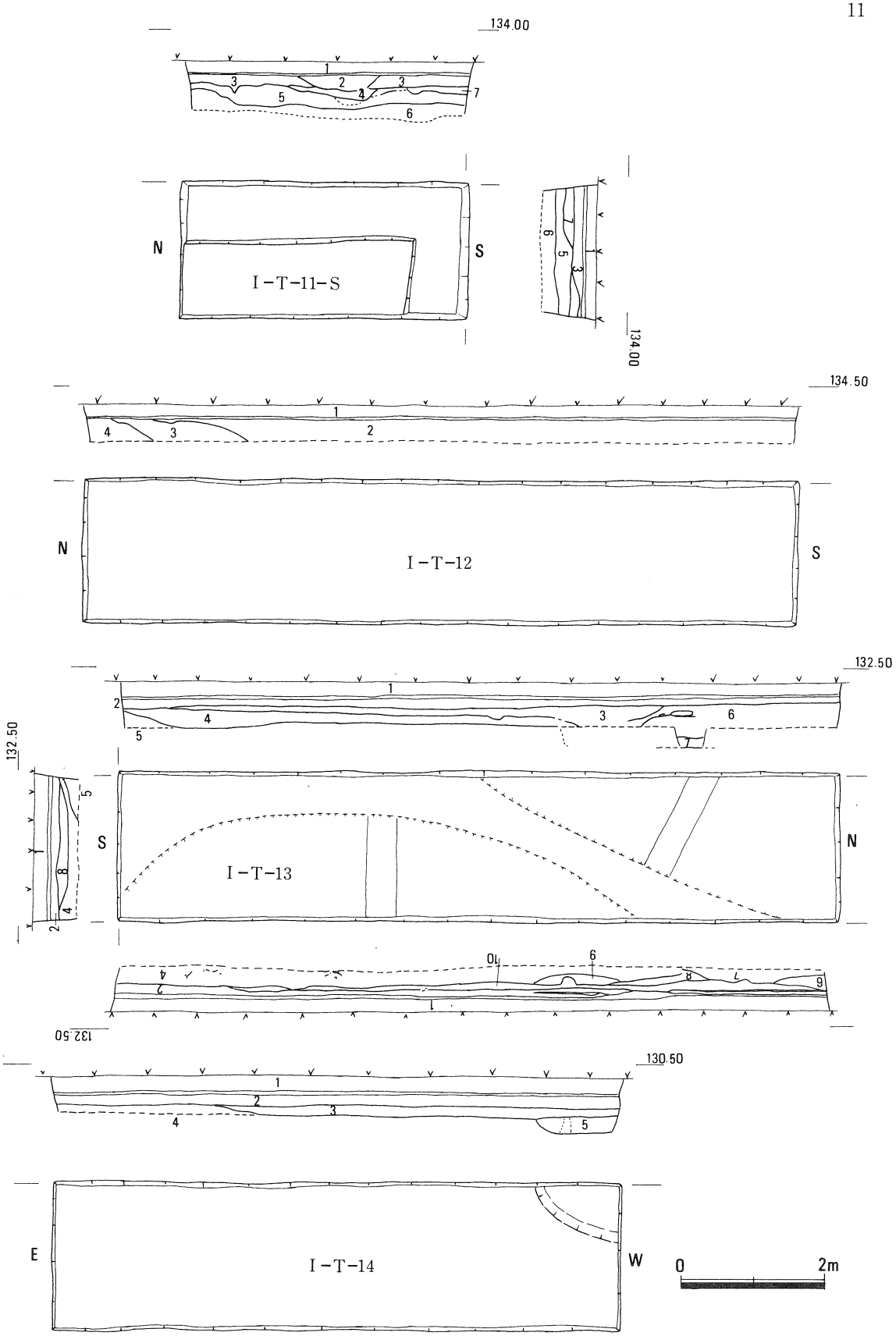


Fig. 7　第一次調査試掘溝　平、断面図　I・T・12～14　（縮尺1：80）

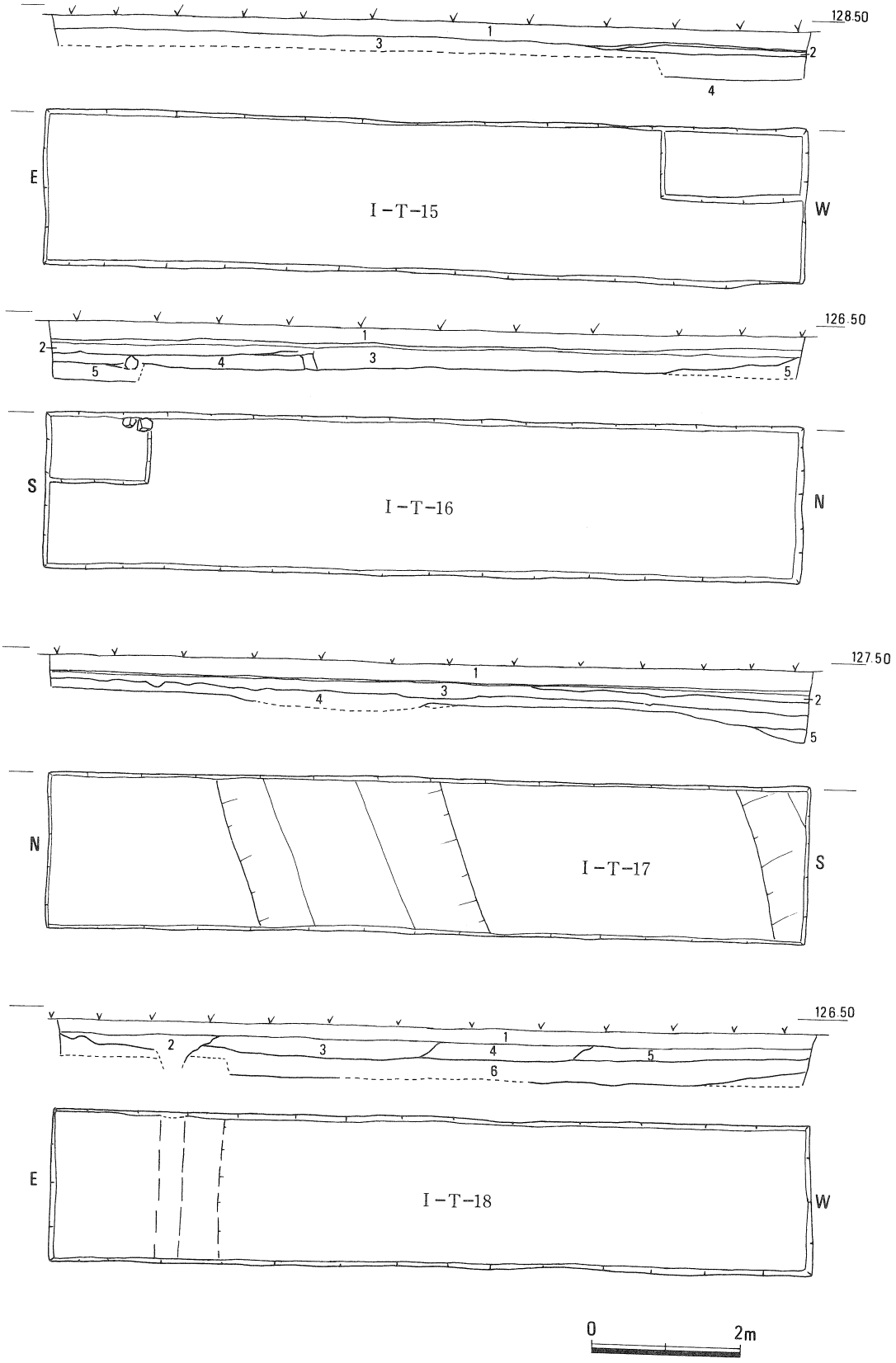


Fig. 8　第一次調査試掘溝　平、断面図　I・T・15～18　（縮尺1：80）

Ⅰ-T-8　2×5m

第2層は旧耕作土層とみられ、中世土器破片が含まれている。以下無遺物層。第7層黒色粘質土層が旧地表を示すものとみられ、以下基盤礫層にいたる。

Ⅰ-T-9　2×10m

第2層は、黄褐色の客土層で、直下が礫層のため運び込まれた土層とみられる。中世土器片を含むが、運び込まれた時期はかなり新しいものと判断される。

第3層の礫は、洪水堆積であり、礫層下に住居跡とみられる落込みがあった。この住居埋土の礫層及び褐色土に混じって多量の土師器、須恵器が折り重なり発見された。

Ⅰ-T-10　2×10m

第2層淡黄色粘質土層は、客土層とみられるものであるが、中世土器を含んでいる。以下砂質、粘質土の堆積があり、基盤層とみられる灰白色砂質土層にいたる。いずれも無遺物層である。5の円形落込みは、畑作に伴うとみられるもので中世以降のものであろう。

Ⅰ-T-11 N　2×4m

第2層に、中世土器を含み、第3層灰色土層に古墳時代土器を含む。第5層暗灰色土層は旧地表とみられ、無遺物層。以下基盤層にいたる。2本の柱穴が発見されたが、これらには中世土器細片が伴い、切りあいからみても中世以降のものと判断される。

Ⅰ-T-11 S　2×4m

第3層暗灰色粘質土層、第4層淡灰色粘質土層及び第5層灰黒色粘質土層、上面に古墳時代須恵器、土師器片を含む。これ等に伴う遺構の存在は明かとならなかった。

第7層の黒色粘質土層は旧地表を示し以下基盤の礫層に至る。

Ⅰ-T-12　2×10m

現水田耕作土層直下は、人頭大の河原石が多数を占める礫層である。付近との比高差からみて、水田形成時ないしはそれ以前に激しく削平を受けた部分であろう。第3層の川砂層は、礫層と同時に形成されたもので同成因に基づくものであろう。

Ⅰ-T-13　2×10m

第3、4、5層に、多量の古墳時代須恵器、土師器片が含まれていた。二棟の竪穴住居跡とみられる楕円型の落込みの輪郭が発見された。その一部について掘り下げを行った結果、不明瞭ではあるがこれ等は住居跡と判断された。これ等に関して壁面肩部分の立ち上がりが土層断面上も不明瞭で、調査にあたっては慎重な対応が要求される。第5層の砂利層は、基盤層と判断される。

Ⅰ-T-14　2×10m

堆積層薄く、第4層は礫層で基盤層と判断される。第5層の黒色砂質土の落込みは、自然要因に基づくものとみられる。第2層旧耕作土層で中世土器片を発見しているが、その他遺構、

遺物はない。

I-T-15　2×10m

第2層の暗灰色粘質土層は、旧耕作土の一部とみられる。第3層は、礫を多く含む黒色粘質土層で、旧地表を示すものと見られる。以下基盤の礫層に至る。遺構の発見なし。

I-T-16　2×10m

第2層は、旧耕作土層。中世土器を含む。第3、4層は無遺物層である。旧地表と考えられる。以下第5層は暗灰色粘質土層で、基盤礫層にいたる。中央部に現在の暗渠が走る。

I-T-17　2×10m

全体に砂質土層の堆積で、第2層に中世土器の包含がある。第3層下面に木炭を含むが、遺物、遺構の発見はない。南端部分は溝肩状に落ち込み、暗灰色砂質土層が堆積する。

I-T-18　2×10m

条里制に伴う溝を想定して設定した試掘溝であるが、条里にかかわる遺構の検出はなかった。湧水が激しく、東半は地山層まで掘り下げていない。2は現在の暗渠である。第1層にのみ中、近世の遺物が伴う。

試掘溝土層注記

I－T－1
1 現耕作土層
2 暗灰色粘質土層（旧耕作土層、中世土器を含む）
3 灰色粘質土層
4 灰色微砂層
5 褐色礫層
6 赤褐色粘質土層
7 青灰色粘質土層

I－T－2
1 現耕作土層
2 灰色粘質土層（旧耕作土層、小砂利多い）
3 灰色粘質土層（小礫含む、粘質上層より強い）
4 灰色粘質土層（旧耕作土層）
5 青灰色粘土層
6 暗灰色粘土層（有機質土）
7 暗灰色粘質土層（粒子やや荒い）
8 灰白色粘質土層
9 褐色砂質土層（粗砂）
10 黄褐色粘土層（三期粘土層）

I－T－3
1 現耕作土層
2 灰色粘質土層（旧耕作土層、中世土器を含む、下部砂の互層）
3 暗灰色粘質層
4 灰黒色粘質土
5 洪水砂

I－T－4
1 現耕作土層
2 青灰色粘土層
3 青灰色粘質土層（中世土器、瓦片含）
4 暗灰色粘土層
5 灰色砂
6 黄褐色粘土層（三期粘土層）

I－T－5
1 現耕作土層
2 明灰色粘質土層（旧耕土層）
3 暗灰色粘質土層（中世土器含）
4 荒砂層
5 灰黒色土層（礫多い）
6 礫層（基盤礫）

I－T－6
1 現耕作土層
2 灰褐色粘質土層（中世土器含）
3 暗灰色粘質土層
4 礫及び黒色粘質土層

I－T－7
1 現耕作土層
2 灰色粘質土層（小礫多い）
3 砂利、荒砂層
4 褐色粘質土層
5 暗灰色粘質土層（有機質土）
6 暗灰色粘質土層
7 黒色粘土層（旧地表）
8 赤褐色地山粘土層
9 暗褐色粘質土層
10 暗灰色粘質土層

I－T－8
1 現耕作土層
2 灰色砂質土層（砂利多い、旧耕土層）
3 褐色粗砂層（マンガン粒）
4 淡褐色砂質土（小礫含）
5 暗灰色砂質土層
6 灰褐色粘質土層
7 黒色粘土層
8 灰黒色礫層

I－T－9
1 現耕作土層
2 黄褐色客土層
3 明灰色砂礫層
4 灰褐色粘土層（地山）

I－T－10
1 現耕作土層
2 淡黄色粘質土層（客土層、中世土器を含む）
3 灰色砂質土層
4 灰色砂質土層（黄色地山ブロック含）
5 灰褐色粘質土層
6 淡黒色砂質土層
7 黒色砂質土層
8 灰白色砂質土層（地山）

I－T－11N
1 現耕作土層
2 灰色砂質土層（中世土器を含む）
3 灰色土層（古墳時代土器を含む）
4 褐色砂質土層
5 暗褐色土層（旧地表？）
6 灰色砂質土層（中世土器を含む）
7 黒色粘質土層
8 灰色粘質土層
9 礫層

I－T－11S
1 現耕作土層
2 灰色砂質土層
3 暗灰色粘質土層（古墳時代土器を含む）
4 淡灰色粘質土層（古墳時代土器を含む）
5 灰黒色粘質土層（上面古墳時代土器を含む）
6 礫層
7 暗灰色粘質土層

I－T－12
1 現耕作土層
2 礫層
3 川砂層
4 礫層

I－T－13
1 現耕作土層
2 淡灰色粘質土層（旧耕作土層）
3 灰色土層（古墳時代土器を含む）
4 暗灰色粘質土層
5 砂利層
6 灰色粘質土層
7 暗灰色粘質土層
8 暗灰色粘質土層（小礫多く含む）
9 暗灰色粘質土層（色調最も暗い）
10 淡灰色粘質土層（旧耕作土層、上層よりやや暗い）

I－T－14
1 現耕作土層
2 明灰色砂質土層（旧耕作土層）
3 明灰色砂質土層（粘質強い）
4 暗灰色礫層
5 黒色砂質土層（礫含む）

I－T－15
1 現耕作土層
2 暗灰色粘質土層
3 黒色粘質土層（礫多い）
4 礫層

I－T－16
1 現耕作土層
2 灰色粗砂層
3 黄褐色粘質土層
4 黄灰色粘質土層
5 暗灰色粘質土層

I－T－17
1 現耕作土層
2 灰色砂質土層
3 暗灰色砂質土層（炭を含む）
4 灰色砂質土層
5 暗灰色砂質土層

I－T－18
1 現耕作土層
2 暗渠
3 暗灰色礫砂層
4 灰色土層（地山ブロック多い）
5 暗灰色粗砂層
6 暗灰色粘質土層
7 礫層

2. 第２次調査の概要

各試掘溝の概要

Ⅱ－Ｔ－１　２×１０ｍ

東西方向に設定した試掘溝で、耕作土下に酸化鉄層が明瞭に広がっていた。第２層は暗褐色土層で、旧耕作土層とみられ、中世土師器片、勝間田焼杯破片などが包含されていた。第３層として、青灰色微砂層が東半分に広がり、その下層に砂利層、西半分には青灰色砂層が広がっていた。以下青灰色粘土層、暗灰色粘土層が堆積しさらに青灰色砂層、砂利層に至る。暗灰色粘土層中には流木とみられる木屑が散在して発見された。第３層以下はいずれも軟質でしまりが悪く、洪水層と考えられる。いずれも無遺物層で洪水の時期は不明である。

Ⅱ－Ｔ－２　２×１０ｍ

幹線道路予定地に南北に設定した試掘溝で、南方約１０ｍの位置に現用水幹線が東西方向に流れており、このため湧水が激しく試掘溝底部は明瞭に把握できなかった。現耕作土下には、第２層暗灰色土層、第３層暗灰色土層が広がっている。これら３層は、土質からみて、新旧の水田層であろうとみられた。４、５層は、いずれも間層で、４層には打ち込まれた杭の先が遺存していた。旧水田耕作土層と考えられる２、３層の時期は不明であるが中世以降のものと考えられる。これらの下層に７層灰色礫層及び黒色粘質土層が広がり、この黒色粘質土層中には流木と考えられる木片が比較的多く遺存していた。下底部は、湧水が激しく部分的な観察をおこなったものであるが、黒色土下には、青灰色粘土層が広がり、その下には砂利層が広がるらしく、その一部が南端部でのぞいている。第７層の黒色土層は、溝状に落ち込んでおり、この窪みは自然流路の存在を示しているのかもしれない。

Ⅱ－Ｔ－３　２×１０ｍ

条里制区画大畦を想定して南北に設定した試掘溝である。湿田で現耕作土層と旧耕作土層とみられる第２・３層の間には薄く酸化鉄層が広がっていたのみで、両層の区別はほとんどつかない。以下北部分で暗褐色有機質土層が広がり、試掘溝北端から２ｍの位置より、厚さ７～８ｃｍの小礫層が５ｍほど南につづいていた。この礫層は、敷並べられたようにきちんと並んでおり、人為的なもののようにもみられた。礫層以下は、荒砂層でさらに青灰色粗砂層、暗灰色粘土層に至る。礫層の存在位置は、ちょうど条里大畦想定線と一致するため、これとの関係が気になるところであるが、この他に条里との関係を想定させる手掛かりは皆無であった。

Ⅱ－Ｔ－４　２×１０ｍ

対象地南端部に設けられた東西方向の試掘溝で、南北方向の条里大畦延長に位置するため、その確認を目的に設定したものである。しかし、掘下げの結果洪水層が浅い位置で発見され、遺構の存在は確認できなかった。耕土層は、東部分が新旧の水田を対応するとみられる二層に

分離できるが、東部分ではその差は不明瞭となる。これらの下には、黄褐色の粘質土が広がり、この層以下はいづれも洪水時のゆるやかな堆積土と判断される。黄褐色の粘質土以下は、西部分には灰色の砂礫土、東部分は砂質土と粘質土の互層となっている。これらのいずれの層も一時的な洪水堆積の状況を示している。出土遺物は耕土層中で備前焼、中世土師器片、勝間田焼壺破片、近世磁器を発見したのみである。

II－T－5　2×9m

西端部、南に細く延びる谷の基部傾斜面に東西方向に設定した試掘溝で、畦畔から畦畔まで9mの長さで掘り下げた。試掘溝に並行及び直交して石組暗渠を破壊したため浸水が激しく調査困難であった。現耕作土下には幅広く酸化鉄層が広がり、おおむね上下二層に区分できた。下層は色調濃く黄褐色を呈し、土の粒子が荒い。この下層には一部に小礫を多く含む灰褐色土層（4層）が広がる。これは5層赤褐色砂質土と一連で、5層には木炭が多く含まれ、水田造成による埋土と考えられる。3層は暗褐色有機質土層であるが、堆積状況からみて、4、5層と同様水田造成時の造成土と考えられる。3層を切りこむ柱穴状の落込みは暗灰色土で満たされ中世陶器片を含むが耕作土中にも中世陶器片が含まれ、比較的新しい時期の掘りこみと見られる。明確な遺構の存在を示すものはない。

II－T－6　2×10m

幹線道路予定地に南北方向に設定した試掘溝で、小畦畔を断ち切り掘り下げを行った。第1層の耕作土は極めて浅く、直下に洪水層と考えられる青灰色の砂礫層が広がっていた。その下には暗灰色粘質土を基盤にした大小の礫を含む層が広がっていた。これは、北方の調査区で確認した弥生以前の基盤層と同一であり、この層までで掘り下げを留めた。本地点は、北東から南西に延びる微高地上に位置しているため、かつての水田造成により、上部はかなり削平を受けているものと判断された。

なお、試掘溝北よりで新旧二条の掘り込みがみられたが、これらはいずれも近世以降の暗渠排水の痕跡と判断された。遺物は第1層で近世磁器片、瓦片が発見されたのみである。

II－T－7　2×10m

対象地西端部に設定したトレンチで、横野川右岸の集落が真近に存在する微高地上に位置する。第1層は現耕作土層で不明瞭な酸化鉄層を挟んで旧耕作土と考えられる暗灰色土層が広がる。さらにもう一枚酸化鉄層を挟んで旧耕作土層と考えられる暗灰色土層が広がる。これら旧耕作土層は、含まれる遺物から、中世以降のものと考えられる。その下には、第4層の黄色土層が広がり、これは細砂を基調に粘質土ブロックを多く含んでいる。以下洪水に伴う堆積と考えられる灰色砂礫層、灰色砂層、黄褐色砂層に至る。遺構の発見はない。

II－T－8　2×10m

微高地上に設定した南北方向の試掘溝である。耕土層下に南部分は黄褐色の客土とみられる

土が広がっている。その下には黒色土層が広がり、この黒色土は礫を含む洪水以降の基盤層とみられ、遺物の包含はなく、遺構と認められるものはない。以下灰色の砂層、礫層が広がる。断面図中央の溝状の切込みは黄褐色砂礫土に黒色土が少量含まれている。暗渠排水とみられる。出土遺物は耕土層で須恵質土器、近世磁器少量を発見したのみである。

II－T－9　2×10m

東西方向に設定した試掘溝で、耕作土中には、中世土師器、勝間田焼杯片、近世陶磁器片が、他の試掘溝に比して多く発見された。耕作土と第2層の間には暗灰色粘質土ないしは灰色砂質土といった薄い間層が部分的に残存しており、暗灰色粘質土中には勝間田焼の陶片が含まれるなど、かつて中世土器包含層が広がっていた可能性が推測できた。第3層は灰色粘質土層、第4層は暗灰色砂層で大礫を含んでいる。第6層は、大小礫で構成される礫層で、下部は荒砂が層状を呈していた。その下層には軟質のグライ層が薄く広がり、以下大礫層が確認された。第2層以下には遺物は含まれていなかったが、第4層暗灰色砂層中より流木とみられる木片が発見された。

II－T－10　2×11m

微高地突端部に設置した南北方向の試掘溝で、第1層耕土層下に酸化鉄層が広がる。この下層に灰色粘質土が広がり、この層中には中世土器片が含まれていた。その下に暗灰色砂礫層（小礫）が存在し、この層中には古墳時代とみられる土師器片が発見された。その下層は黒色粘土層でこれは古墳時代の表土層に相当するとみられる。これ以下は暗色砂礫層で洪水のあとを示している。この砂礫層中より弥生時代後期の土器片少量が発見された。この土器片は破面の角が摩滅し全体に円礫状を呈する。おそらく、洪水により押し流されてきたものであろう。土師器片包含層については、発見位置はかつての溝状の流路底部分に相当するとみられ、このため後世の削平を免れたものと考えられる。いずれにしろ、下部の洪水による礫層の形成時期は弥生時代以降古墳時代以前のものとみてよく、第1次調査部分の堆積状況と同一と考えてよいという結果が得られた。

II－T－12　2×10m

条里推定線南北大畦を想定して設定した東西方向の試掘溝であるが、条里に関する遺構の存在は明らかにならなかった。いずれも、極めて粘質の高い土質で、掘り下げは困難を極めた。現耕作土下には明瞭な酸化鉄層が広がっていた。直下に暗灰色粘土層が広がりこれは旧耕作土層の一部残存であろうとみられた。その下には第3層灰色粘土層、第4層暗灰色粘土層で有機質土。第4層下部で中世陶器破片が発見された。その下層は暗青灰色粘土層で無遺物層、以下青灰色砂利層に至る。粘質の強い厚い堆積層の存在からみて旧状は沼状の湿地であった可能性が強い。

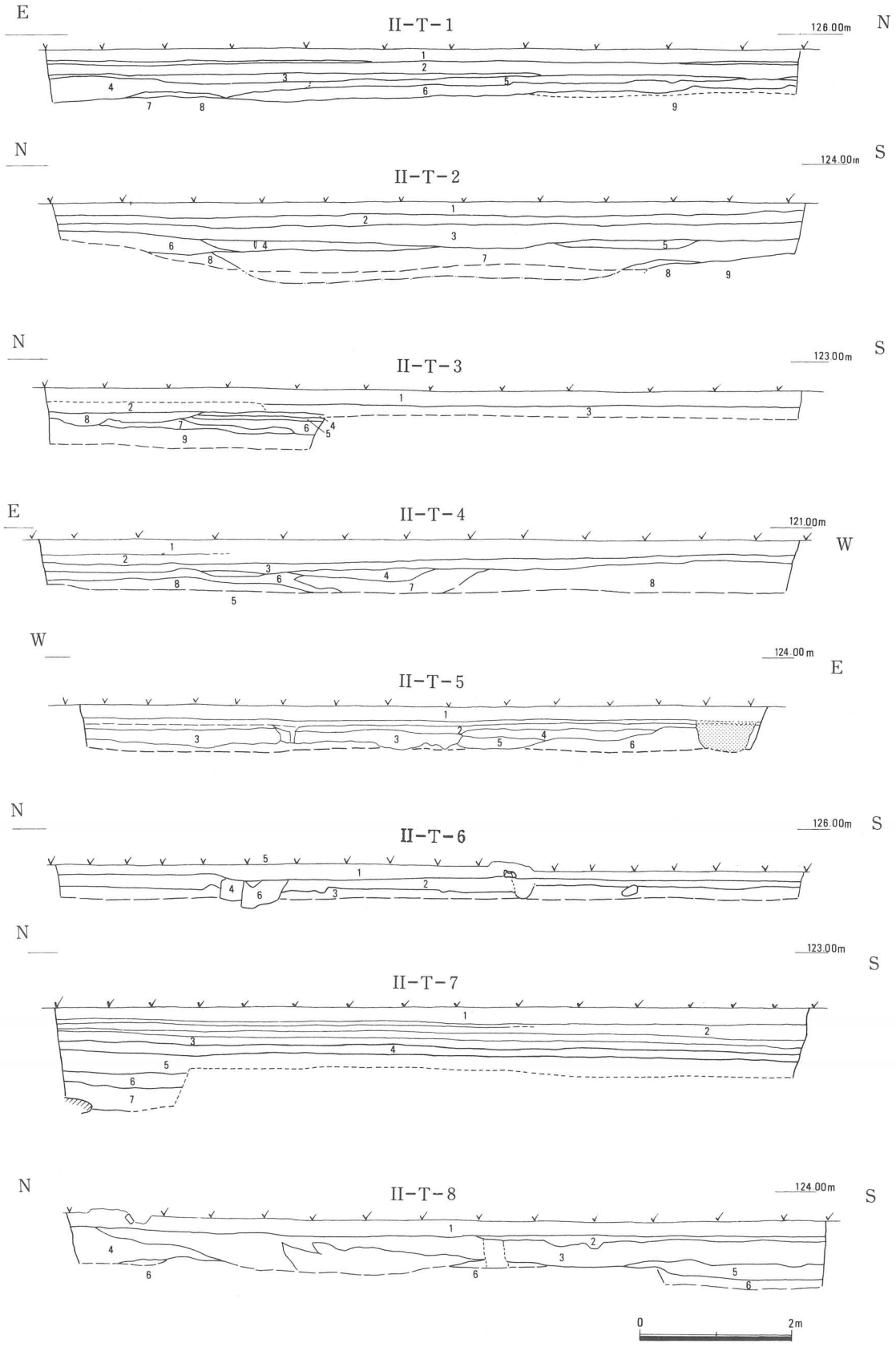


Fig. 9　第二次調査試掘溝、断面図　II・T・1～8　（縮尺1：80）

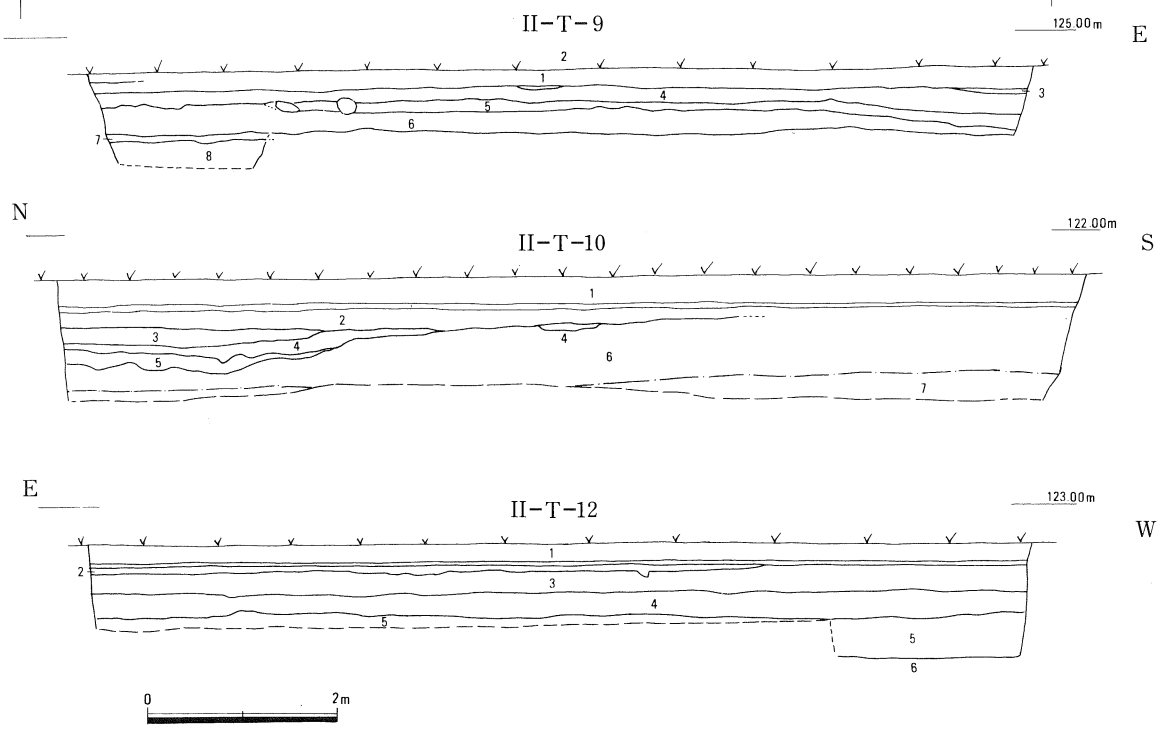


Fig. 10　第二次調査試掘溝、断面図　II・T・9、10、12（縮尺1：80）

試掘溝土層注記

II－T－1
1 現耕土層
2 暗褐色土層
3 青灰色微砂層
4 砂利層
5 青灰色砂層（細砂）
6 暗灰色粘土層
7 青灰色粘土層
8 青灰色砂層
9 砂利層

II－T－2
1 現耕土層
2 暗灰色土層
3 暗灰色土層
4 灰色土層
5 暗灰色土層
6 灰色礫層
7 黒色土層（木屑多い）
8 青灰色粘土層
9 砂利層

II－T－3
1 現耕土層
2 暗灰色粘質土層
3 暗灰色粘質土層
4 暗色有機質土層
5 小礫層
6 荒砂層
7 青灰色粗砂層
8 暗色有機質土層
9 暗灰色粘土層

II－T－4
1 現耕作土層
2 旧耕作土層（小砂利含む）
3 黄褐色粘質土層
4 褐色粘質土層
5 灰色粗砂層
6 灰褐色粘土層
7 灰色砂質土層
8 灰色細砂層

II－T－5
1 現耕作土層
2 灰色砂質土層（粘質土を含む）
3 暗褐色土層
4 灰褐色砂質土層
5 赤褐色砂質土層（木炭を含む）
6 青灰色砂礫層

II－T－6
1 現耕作土層
2 青灰色砂礫層
3 暗灰色粘質土層（礫多く含む）
4 暗灰色土層（礫多く含む）
5 灰色土層（暗渠）
6 青灰色粘質土層（暗渠）

II－T－7
1 現耕作土層
2 暗灰色土層（旧耕作土層）
3 暗灰色土層（旧耕作土層）
4 黄色土層（細砂と粘質土がブロック状に混在している）
5 灰色砂礫層（小礫多い）
6 灰色砂層
7 黄褐色礫層

II－T－8
1 現耕作土層
2 黄褐色土層
3 黒色土層
4 灰色礫層（拳大）
5 黒色礫層
6 黄褐色荒砂層

II－T－9
1 現耕作土層
2 暗灰色粘質層
3 灰色砂層
4 灰色粘質土層
5 暗灰色砂層
6 礫層（下部荒砂層）
7 軟質グライ粘土層
8 大礫層

II－T－10
1 現耕作土層
2 灰色粘質土層（やや黒味強い）
3 灰色粘質土層（やや砂っぽい）
4 暗灰色砂礫層（土師器含む）
5 黒色粘土層
6 暗灰色砂礫層（含む弥生土器）
7 6と基本的に同一層（黄味強い）

II－T－12
1 現耕土層
2 暗灰色粘土層
3 灰色粘土層
4 暗灰色粘土層
5 暗青灰色粘土層
6 青灰色砂利層

3. 出土遺物

全体の出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶磁器類、近現代陶磁器類等があるが、ここでは遺構の存在と関わりの深いと考えられる、Ⅰ－Ｔ－９の土師器、須恵器、Ⅰ－Ｔ－１１の須恵器（Fig.12-1）について図示する。なお、Ⅰ－Ｔ－９の土師器、須恵器については、８９年度の対象地の調査によって一括遺物であることが明確になった。

土　師　器

壺（Ｆｉｇ．１１－１、２、６）

１は口縁部を欠いているが、胴部はほぼ完形に復元できた。比較的厚手の作りで、底部はやや尖底ぎみの丸底である。外面は縦刷毛ののち斜め方向に刷毛を加え、横なでで仕上げている。内面はへら削りで、斜めに削り上げている。２は、底部を欠くがほぼ全形が復元される。口縁部はゆるく外反し、胴部は球形を呈する。下半の形態から底部は丸底とみてよい。内外二次的火を受けた為の剥離が激しく仕上調整は不明である。６は完形に復元できた。口縁部はゆるく外反し上半で屈曲をみせる。胴部は球形を呈し、底部はやや偏平な丸底である。口縁部内外面は横なで仕上げ。胴部外面は斜め刷毛目、内面はへら削りによって仕上げられている。

甕（Ｆｉｇ．１１－３～１０）

３、４、７、８、１０は、くの字状の口縁をもつ甕形土器で、卵形の胴部をもっている。３以外は、底部を欠いているが、いずれもやや尖りぎみの丸底を呈するものと考えられる。３、４、８の口縁部は内外面横なで仕上げで８の内面の一部に刷毛目が残る。内外面７、１０は外面刷毛目仕上げ、内面横なでで仕上げている。いずれも胴部外面は刷毛仕上げ、内面はへら削りによって仕上げられている。５、８は口縁部下段に屈曲部段を持ついわゆる二重口縁の名残りと見られる個体である。口縁部外面は横なで仕上げ、５は内面に横方向の刷毛目を残している。胴部外面は刷毛仕上げ、内面はへら削りである。

高杯（Ｆｉｇ．１１－１１～１４）

いずれも分割成形法によりつくられている。１１は杯部片。杯部と口縁部が屈曲するいわゆる二重口縁形の高杯で、外面は刷毛仕上げ、一部に横方向のへら磨き状の条痕を残す。内面は横なで仕上げ。１２～１４は脚部片。１４は内面にしぼり痕を残し、接合部中央部に棒による孔痕が残る。

須恵器

杯（Ｆｉｇ．１２－１）

１は杯部片。淡灰色を呈し、焼成堅緻。口縁部はやや内傾して高く立ち上がり、端部を丸く

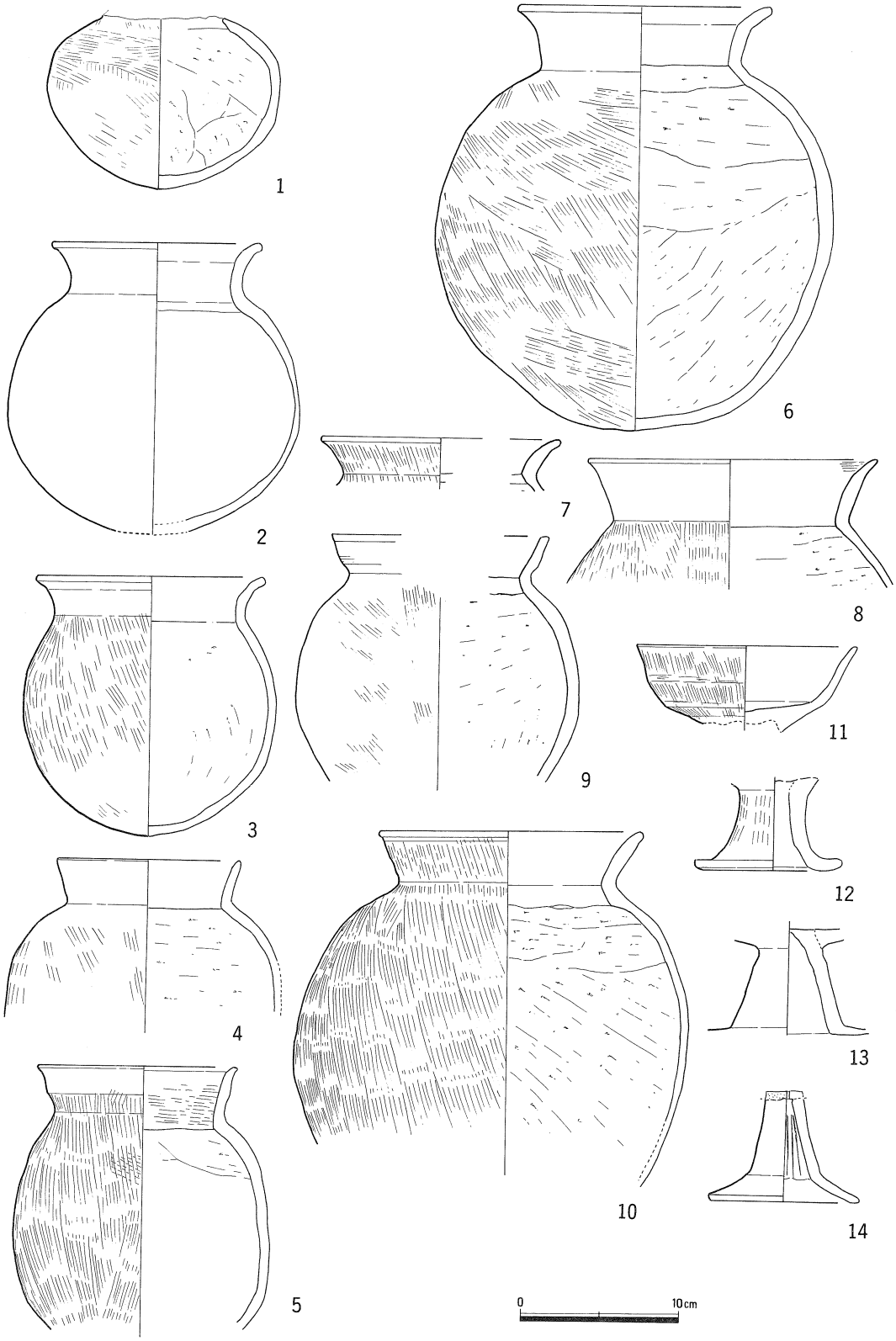


Fig. 11　I-T-9 出土土師器実測図　(縮尺１：４)

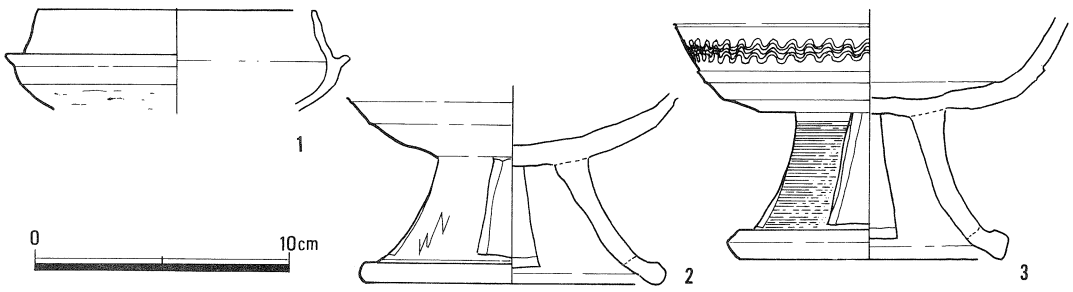


Fig. 12　出土須恵器　（縮尺１：３）

おさめる。杯部外面はかなり上方までへら削り痕を残している。内面は横なで仕上げ。

高杯（Ｆｉｇ．１２－２、３）

２、３いずれも焼成堅緻。２は淡灰色を呈し、３は暗灰色を呈する。４孔の長方形透孔を有す。１は、内外面横なで仕上げ。外面にヘラ記号風の折れ線が付けられている。３は、杯部外面に櫛描波状文を巡らす。脚部外面は、カキ目痕を残す。

第３章　概　括

第１次調査による遺構発見箇所は、いずれも隣接する試掘溝Ｉ－Ｔ－９，Ｉ－Ｔ－１１、Ｉ－Ｔ－１３の三箇所に限られる。

各試掘溝とも、発見された遺構は集落跡に伴うもので、出土土器も古墳時代後期五世紀～七世紀に至る一連のものである。従って、これ等試掘溝部分周辺に古墳時代集落の広がりが考えられる。

推定可能な古墳時代集落範囲は、別図のとおりである。

遺構発見のいずれの試掘溝も、現水田耕作土直下が遺構面ないしは遺物包含層であり、一帯の集落跡残存面も同様表土層は極く浅いと考えられる。従ってこれらの保存措置については、慎重な配慮が必要である。

また、第２次調査によって周辺に遺構の存在が考えられたのはII－Ｔ－１０があるが、他の試掘溝の状況は、かつて人の生活が行われていた可能性が強く感じられるものの、その後の洪水、水田造成等によってほぼその痕跡が消失してしまっているということであった。第２次調査の結果を総合して考えると埋蔵文化財の保護、調査対象となる遺跡範囲は現状では想定できない。

第Ｉ次、第２次調査を通じて埋蔵文化財保護上特に問題となるのは、古墳時代集落遺跡、別添地図線引部分約５万㎡ということになる。

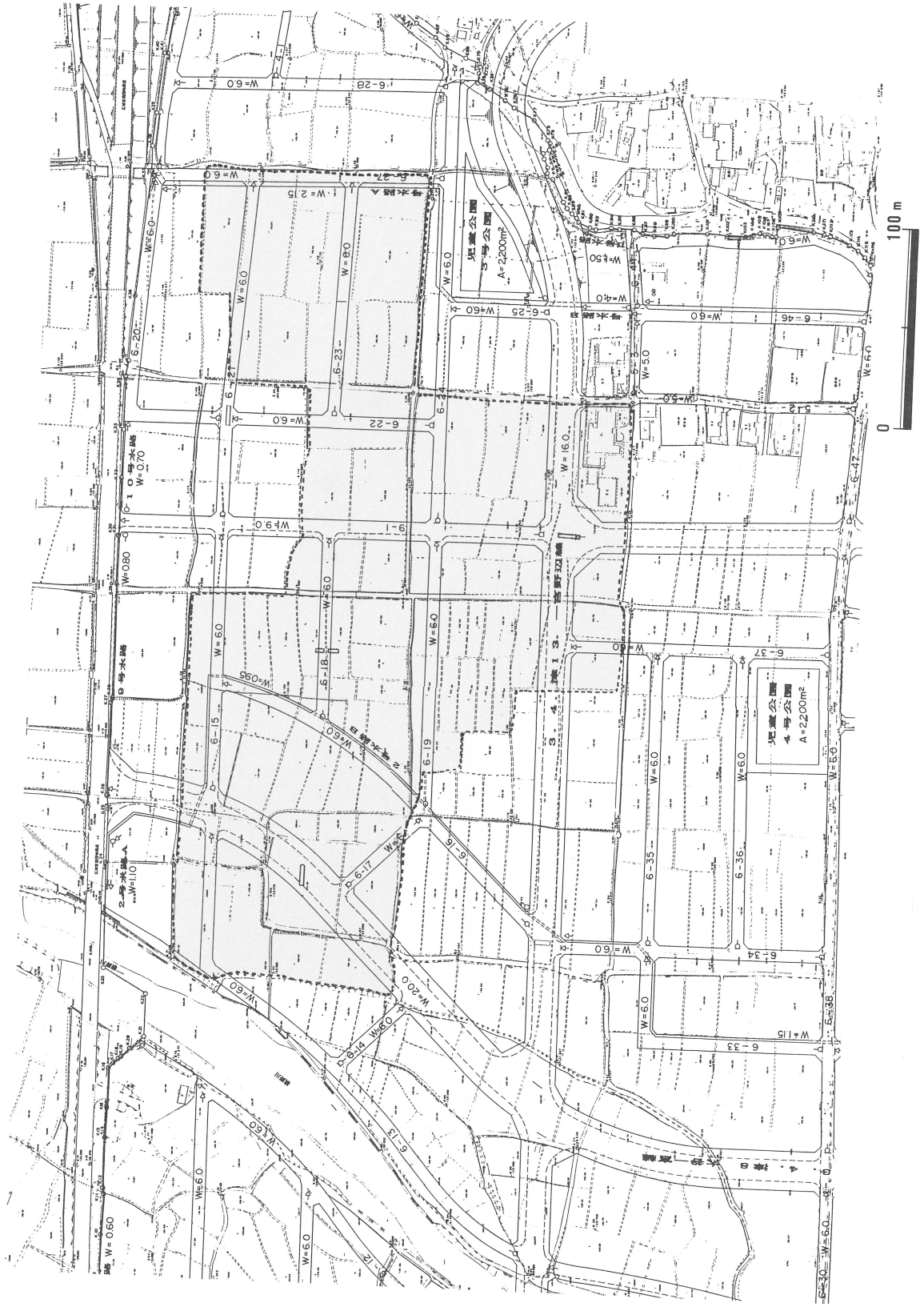
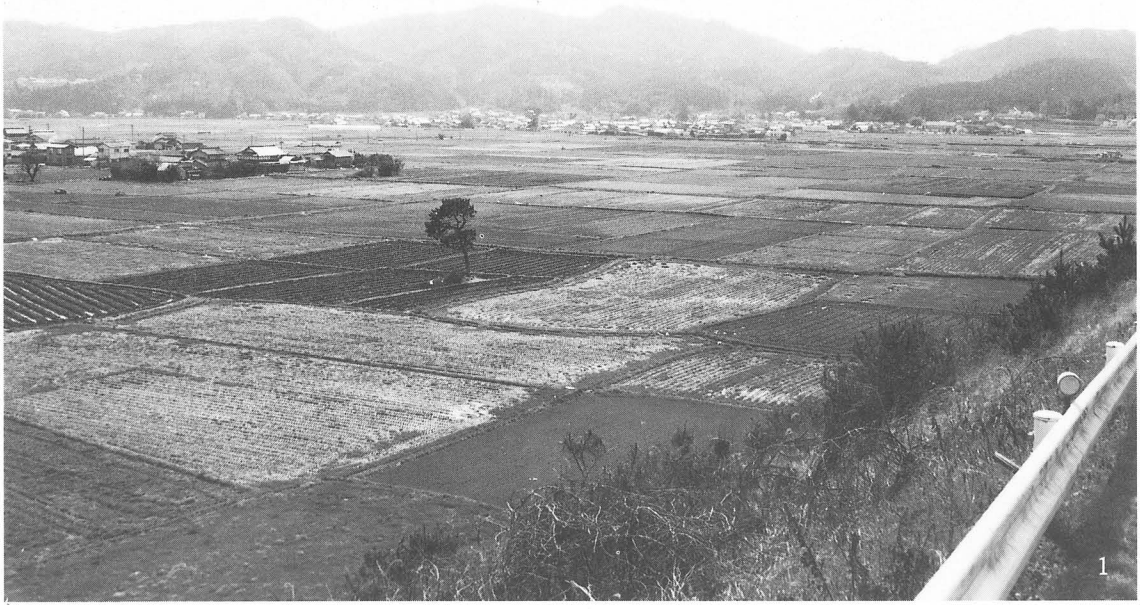
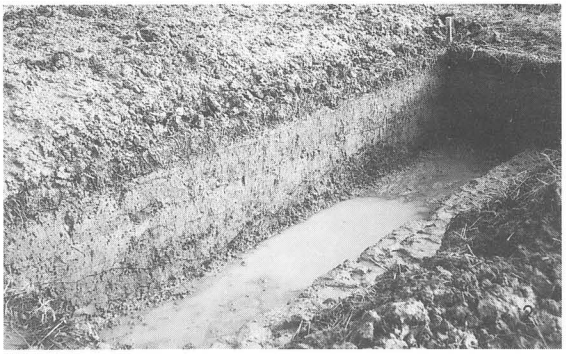
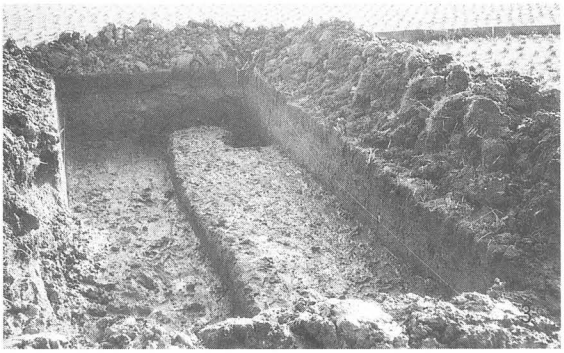


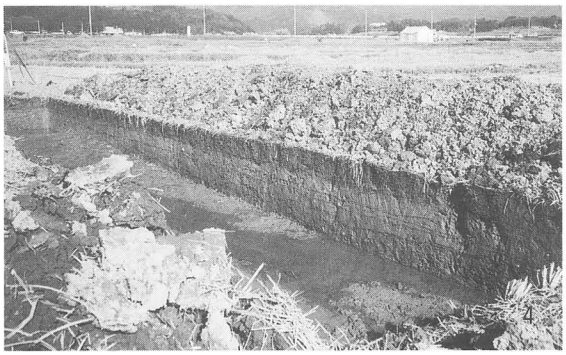
Fig. 13　古墳時代集落遺跡推定範囲　（縮尺１：３，０００）

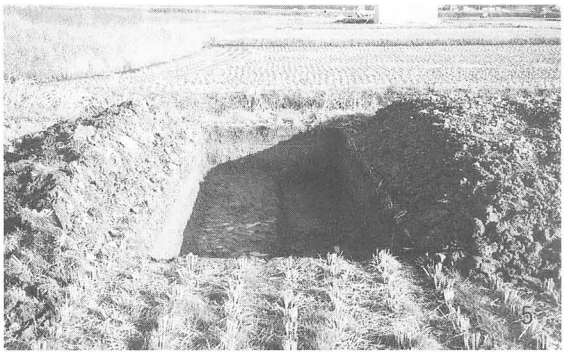
写真図版



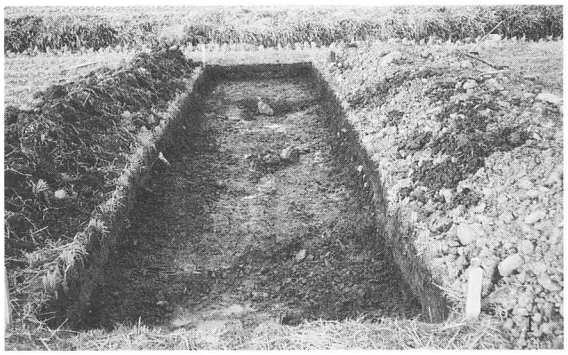


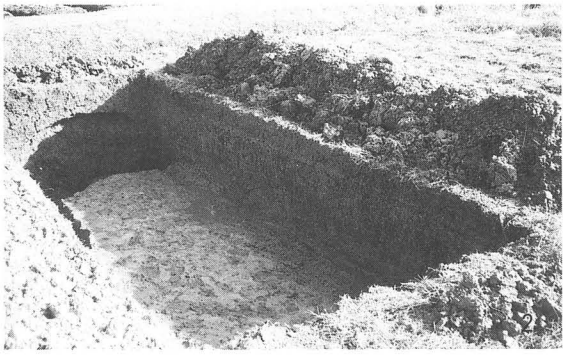


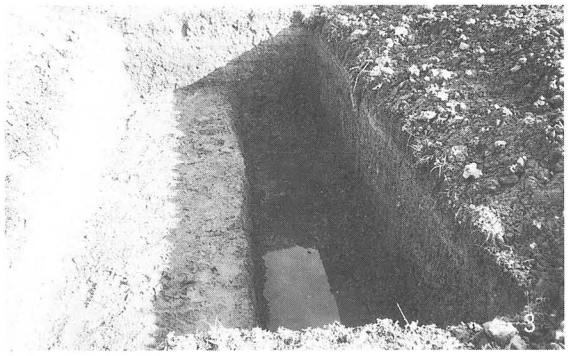


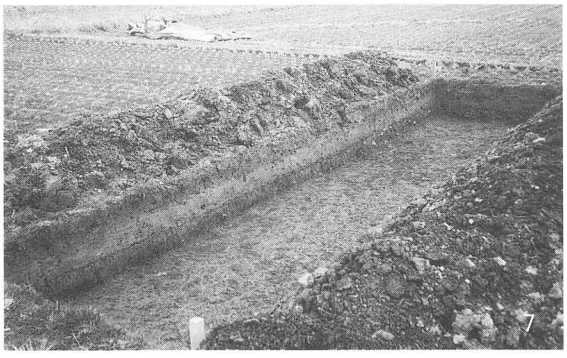


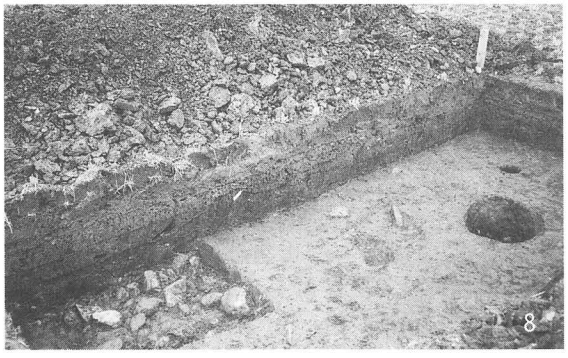
1．土地区画整理予定地遠景
2．試掘溝Ⅰ－丁－1
3．試掘溝Ⅰ－丁－2
4．試掘溝Ⅰ－丁－3
5．試掘溝Ⅰ－丁－4
6．試掘溝Ⅰ－丁－5

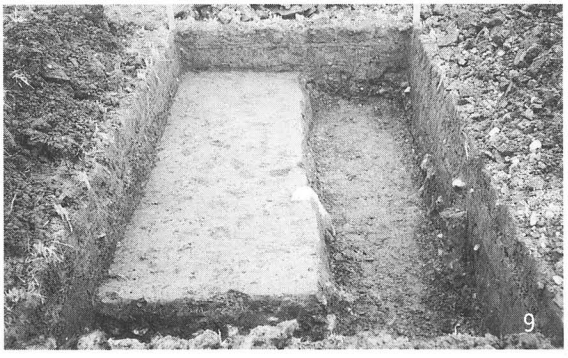




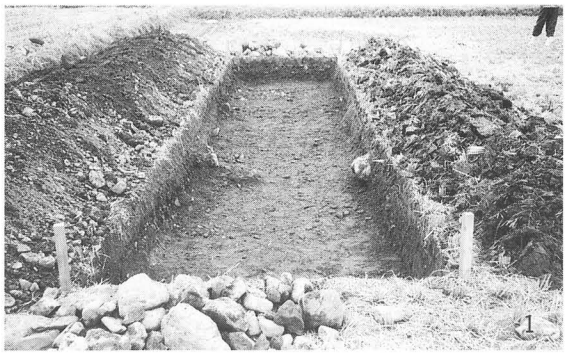


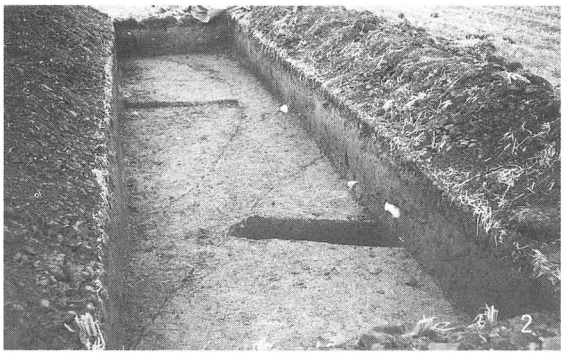


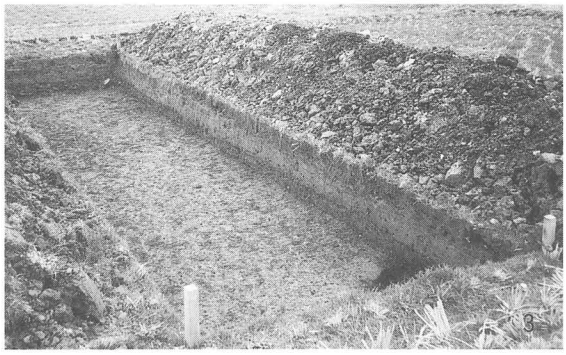


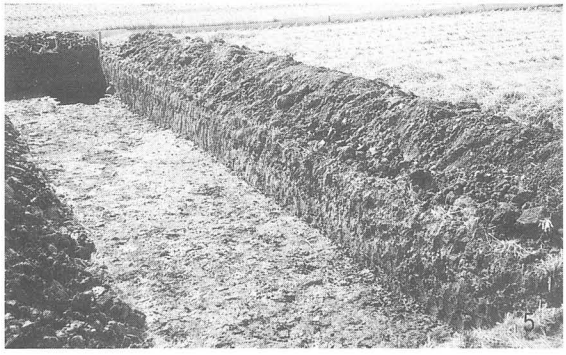


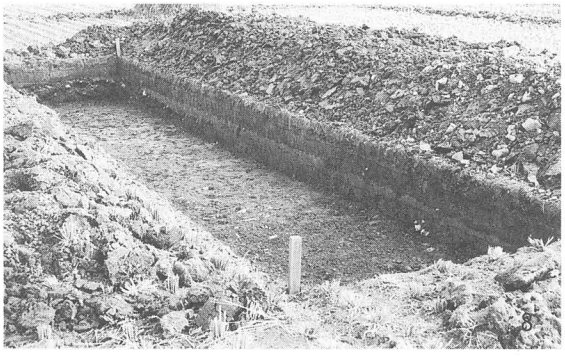
1．試掘溝Ⅰ－Ｔ－6
2．試掘溝Ⅰ－Ｔ－7
3．試掘溝Ⅰ－Ｔ－8
4．試掘溝Ⅰ－Ｔ－9
5．試掘溝Ⅰ－Ｔ－9 土師器出土状況
6．試掘溝Ⅰ－Ｔ－9 住居掘方
7．試掘溝Ⅰ－Ｔ－10
8．試掘溝Ⅰ－Ｔ－11－Ｎ
9．試掘溝Ⅰ－Ｔ－11－Ｓ



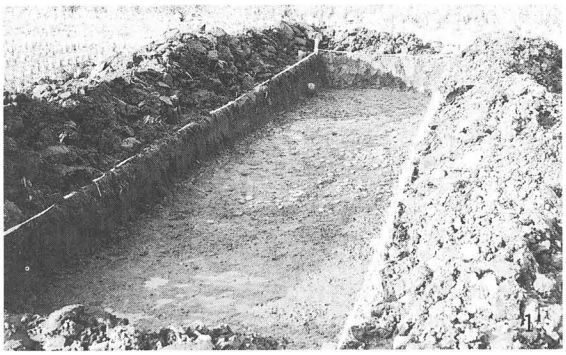


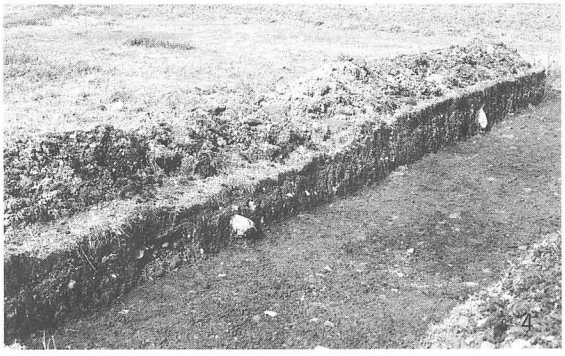


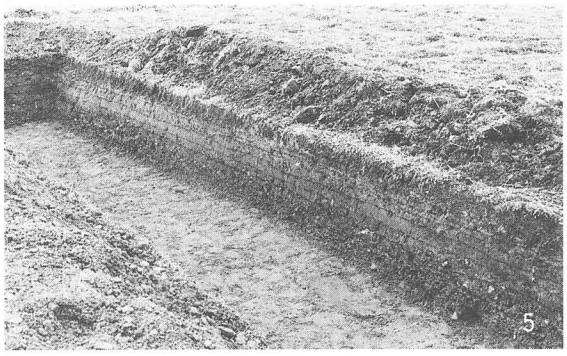


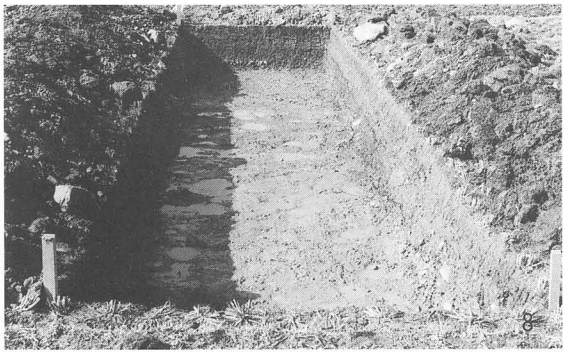


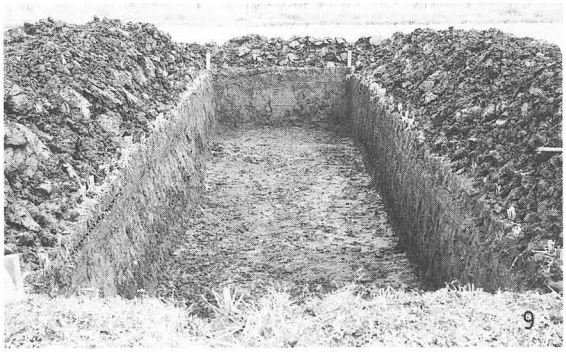
1．試掘溝Ⅰ－丅－12
2．試掘溝Ⅰ－丅－13
3．試掘溝Ⅰ－丅－14
4．試掘溝Ⅰ－丅－15
5．試掘溝Ⅰ－丅－16
6．試掘溝Ⅰ－丅－17
7．試掘溝Ⅰ－丅－18
8．試掘溝Ⅱ－丅－1
9．試掘溝Ⅱ－丅－2





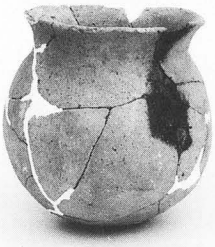






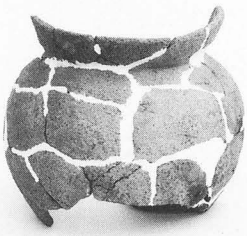
1．試掘溝II－丁－3
2．試掘溝II－丁－4
3．試掘溝II－丁－5
4．試掘溝II－丁－6
5．試掘溝II－丁－7
6．試掘溝II－丁－8
7．試掘溝II－丁－9
8．試掘溝II－丁－10
9．試掘溝II－丁－12

1

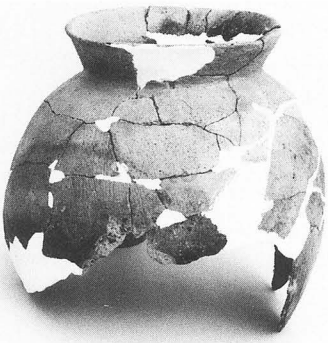


2

3

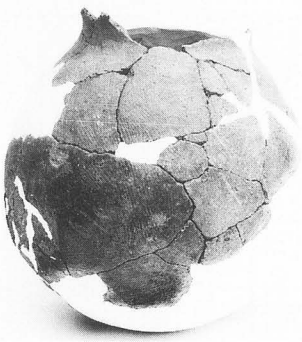


4



5

6



7

8

9

試掘溝Ⅰ－Ｔ－９出土の土師器、須恵器

1. Ｆｉｇ　11－2
2. Ｆｉｇ　11－3
3. Ｆｉｇ　11－6
4. Ｆｉｇ　11－9
5. Ｆｉｇ　11－10
6.
7.
8. Ｆｉｇ　12－2
9. Ｆｉｇ　12－3

津山市東一宮地区土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第32集

１９９０年３月３１日

発行　津山市教育委員会
岡山県津山市山北５２０

印刷　福井印刷株式会社
岡山県津山市高野山西2115-18